

祝賀メッセージ

元炳旰 Pyong-Oh Won (韓国・慶熙大学校名誉教授)



日本鳥学会 100 周年をお祝いし、今後のさらなるご発展を心からお祈りいたします。

2010 年 10 月、記念事業検討委員会から「海外研究者からのメッセージについて、ご自身と鳥学会（員）との関わりを書いてほしい」との依頼があり受諾することにした。

1956 年、韓国戦争後、ソウルの山林局中央林業試験場に職を得た私は、東京の黒田長禮先生に手紙を書いた。私は中学 2 年の夏まで、日本語教育を受けたのでどうにか日本語を話し、読み書きできることが幸いした。

戦火が止めば、少年時代からの夢の母国の鳥獣類を調査し、韓半島の鳥獣類相を総合したいと述べ、関係の文献、特に近刊の論文をお願いした。すると、1 月もたたずに数冊の単行本、鳥獣集報と戦後林野庁刊の鳥類の食性に関する調査報告書（池田真次郎調査）等の資料が届いた。

これらは、戦火にあってほとんど何もない林業試験場にとって最初の文献であり、研究の方向となったものである。また、全く鳥学者のいない韓国にあって、孤立無援の私に、黒田長禮先生は、先ず採集を進めて行く中で研究の未来が見えてくると、度々励ましご指導くださった。

私の父、元洪九（後の北朝鮮の鳥学者）は鳥学に強い関心を持ち、十分な図鑑もない時代に、韓半島の不明種は黒田先生に同定してもらっていた。1930 年、安州農業学校の教師として学生達を引率して修学旅行に来日した際には、黒田先生のお宅を訪問し、父は先生宅に 1~2 泊して貴重な標本を見せていただき、親身も及ばぬ歓待を受けた。

黒田長久博士とは、1960 年第 12 回 ICBP（国際鳥類保護会議、東京）とコーネル大学での IOC や 1964 年ホンコンでの ICBP アジア会議の時是一緒に参加した。1986 年カナダのオタワの British Columbia 大学の IOC の時も、黒田長久博士が IOC の名誉会長に選ばれた過程を見ることができて、ますます親交を深めた。

黒田長久博士は、私の学位論文もご指導くだ

さった。私は直接お宅を訪問しご家族との写真も一緒に撮った。数巻の貴重な著書と“The Bird's of Japan”やご自身の草稿なども頂戴した。黒田長久博士は常に私の力になってくださった。

山階芳麿先生は第 12 回 ICBP の際、初めてお目にかかったのだが、会議の前から、韓国から日本への入国が困難なので、アジアセクション会長の山階アジア部会長から、エール大学の ICBP 会長 S. D. Ripley 会長宛に、韓国大統領に韓国代表をぜひ参加させて欲しい旨の公文書を出してもらい、お陰で私は難しい国内の審査をパスし、出国が許されて日本旅行が可能になった。

当時、韓国は貧しく林業試験場の給料で生活することは誠に困難だった。そこで旅費も韓国訪問中の米国学術院太平洋地域事務総長 H. J. Coolidge 博士を通じて、ソウルアジア財団からの援助で参加が可能になった。また、日本の代表的な鳥類保護施設、サンクチュアリ、研究所等の訪問に要する旅費一切も ICBP アメリカセクションの提供で可能になった。

山階芳麿先生は日本経済新聞（1979 年）に連載した「私の履歴書」の 13 回目に「朝鮮生き別れ父子の橋渡しも」の中で私と父を次のように書いている。

1936 年に行った朝鮮半島の採集旅行では、平南の安州農業学校の元洪九という、鳥にくわしい先生に案内してもらい、採集を手伝ってもらった。ところが朝鮮戦争のために、父洪九と息子の元炳旰は南北に離ればなれになってしまった。

元炳旰もやがて鳥学者となり、大学教授として私の研究所に立ち寄ったが、南北の対立は厳しく、父子で面会はおろか文通もできない。そこで私が父子の橋渡し役をすることになった。父が私の所に手紙をよこす。私はそれを読んで差し障りのないところをソウルの息子へ書き送った。息子もまた同様にする。韓国戦争直後から 20 数年間、ずっと橋渡し役を続けた。先般、父の元洪九が亡くな

り、ついに親子の対面はかなわなかったが、私がこのような役目を果たしたのも、人間として当然のことではなかったろうか。

25 回目の「妻の死」では、「韓国の元炳昨博士は、私は母を亡くしたような気持ちになります」と書いてきた。

1978 年 6 月、私が初代館長をした韓国慶熙大学校自然史博物館の開設式には、山階先生とスミソニアン研究所のセクレタリ S. D. Ripley 博士も参席して特別講演をしてくださった。私は 1962 年 - 63 年エール大学大学院（ピーバディ自然史博物館）でポストドクとして S. D. Ripley 博士のご指導をいただいた。

1966 年 6 月に第 17 回 IOC（オックスフォード大学）参加の時は、帰路、どこかの日本大使館で日本入国ビザを取らねば入国できなかつた。ロンドンの日本大使館で、山階先生が同行すると説明したら、ホンコンの日本大使館で入国ビザが取れるようにしてくれた。山階先生はこのように私事までもこまやかにご配慮くださった。

私の学位論文は「山林保護上からみた韓国の鳥獣類相の研究」である。哺乳類は京都大学理学部の徳田御稔先生にご指導いただいた。先生は 1956 年以來、文献を寄贈され、お手紙で激励くださった。1960 年東京で ICBP があつた時、京大の徳田先生の研究室を訪問したが、その際、先生は次のようにおっしゃった。

「学位論文とは完成したものはございません。あなたは確実に学術的信念があるし、その第一歩をすでに踏んでいます。それで結構です」

私は涙が出るほど感激した。先生は私の論文を検討しながら懇切なご指導をくださった。その後先生は、数年間大阪の自然博物館の研究員をされたが、高血圧のために永眠された。その間私は、先生の奥様が京都で療養生活をしているのを知り、何度かお見舞いに参上した。先生は「私としては学者としての責任を果たしたままで、この上ご心配いただくことはありません」とお手紙の中に書いている。

私が農林部山林局中央林業試験場（現山林庁林業科学院）に勤めていた 1956～1960 年は、韓国と同じ機関である東京目黒の林業試験場保護科の宇田川竜男博士と親しくなった。宇田川博士に日本林試保護科の研究を紹介してもらったことは、私の研究に大いに役立った。

1964 年からはアメリカ政府の補助金でアジア地

域のバンディングのプロジェクト “Migration and survival of the Birds” の遂行中、韓国からは山階鳥研に山林庁の禹漢貞を派遣して日本のバンディングを手伝った。禹漢貞は 2 年半の在日中、日本の実態を見習い、帰国後論文、“Zoogeography, Migration and Ecology of Birds of Central Korea” を山階芳麿、黒田長久両先生の指導の下に完成し、1969 年九州大学農学部で学位を受けた。私が北海道大学で学位をとって以来、2 番目の荣誉である。

この間（1963～1969）、私のチームが韓国でバンディングした鳥は 133 種 186,000 余個体であつた。

私の学位は、黒田長禮博士が 1960 年代初め「鳥」雑誌に、鳥学研究者として日本では 13 番目に受領したと紹介している。それまでは貴族の受領が多かつたのである。日本の大先輩の先生方、山階芳麿、黒田長禮、黒田長久、徳田御稔先生とともに、北大の犬飼哲夫指導教授等、感謝に堪えない次第である。外にも、三島冬嗣、由井正敏、藤巻裕蔵、正富宏之先生は論文、報告書等を何度も恵贈してくださった。

長崎の鴨川 誠先生とは、対馬のキタタキの本を書いた 1982 年から時々訪韓され、私の家に泊まって韓国のキタタキ棲息地探訪（京畿道光陵）をし、釜山の洛東江下流を舟で水鳥類を観察したりした。それから私が先生のお宅を訪問してお世話になり、出水のツルを観察したり、現地で特別講演もした。

もう一人の親しい友人—動物作家の遠藤公男先生とは、1960 年、東京で会って以来、いろいろお世話になっている。氏は私の一家を通して韓半島の悲劇を描いてくれた。『アリランの青い鳥』（講談社 1984）である。それを北韓では映画化し全国的に放映した。韓国では大学などで鑑賞することができる。日本では全国的に上映されて大きな反響をおこした。

日本で開催されたハクチョウ、ツル、水禽類などの国際シンポジウム等には 10 数回参加して各地へ行き発表もした。以上のように、私と日本の方々とはあまりにも親しく、私的な交流も続いている。

今私は New Monograph として “The Birds of Korean Peninsula” をまとめているが、来年または再来年には完成のつもりで頑張っている。これまで私は近刊、「自然生態系の復元—鳥類棲息地の造成と保護—」を始め、20 余の単行本と学術論文 180 余編（一部共著）を発表したが、日本の鳥学者達の国境を超えたご援助と友情のお陰であつたと深く感謝する次第である。